

通常の学級における 特別支援教育のあり方に関する研究(1年次)

～支援を要する子どもへの支援の充実を図るための巡回相談の取組を通して～

槻木 知子 (長期研修員／福岡市立百道小学校 教諭)

竹森 千峰子 (長期研修員／福岡市立当仁小学校 教諭)

青柳 由美子 (長期研修員／福岡市立横手中学校 教諭)

福岡市(以下本市)の事業である巡回相談・専門家チームは、通常の学級に在籍するLD(学習障がい)、ADHD(注意欠陥多動性障がい)、高機能自閉症等の発達障がい児への教育的支援を実施している。本研究では、巡回相談・専門家チームによる学校支援を通して見えてきた現状から、支援を要する子どもへの支援体制を推進していくために必要な条件を探っていった。

I 研究主題に関する基本的な考え方

1 主題設定の理由

(1) 特別支援教育における国の動向から

平成19年4月、障がいのある幼児児童生徒への教育の一層の充実を図るため、「特別支援教育」が学校教育法に位置づけられた。平成20年3月に告示された小学校学習指導要領、中学校学習指導要領、幼稚園教育要領において、障がいのある幼児児童生徒の指導にあたって配慮する事項が明記されている。また、平成21年3月に告示された新しい高等学校学習指導要領においても、「障害のある生徒などについては、各教科・科目等の選択、その内容の取扱いなどについて必要な配慮を行うとともに特別支援学校等の助言を活用しつつ、例えば指導についての計画又は医療、福祉、労働等の業務を行う関係機関と連携した支援のための計画を個別に作成することなどにより個々の生徒の障害の状態等に応じた指導内容や指導方法の工夫を計画的、組織的に行うこと」と明記された。

平成20年9月に実施された全国特別支援教育体制整備状況調査によると、幼稚園、小・中学校において幼児児童生徒の実態把握は90%以上の学校で行われている。高等学校でも70%以

上の学校で実態把握が行われており、前年の36%に比べて大きく進んでいる。巡回相談等外部機関の利用に関する調査項目では幼稚園、小学校に対し、中・高等学校の数値が低くなっている。今後、中・高等学校に対して支援の充実を図るためには、これまで小学校で行われてきた支援を引き継いでいく等の取組を充実させる必要があると考える。

(2) 本市の取組から

今年度行った「通常の学級における特別な教育的支援を必要とする児童生徒の調査」によると、市内で通常の学級に在籍するLD、ADHD、高機能自閉症等の発達障がい児の数は1,023名であった。また、106校の学校から特別支援教育支援員配置の希望があった。支援を要する子どもに適切な支援を行ってきたいという各学校のニーズは高まってきていると思われる。

本市では学校へ支援を行う外部リソースの一つとして、平成16年より発達教育センターの巡回相談を開始している。これまでは小・中学校を訪問対象としていたが、今年度より幼稚園、高等学校も対象となった。その他、発達教育センターの教育相談や特別支援学校のセンター的機能、通級指導教室等が現在利用されている。

人的な支援としては平成 19 年度より学校生活ボランティア、平成 20 年度より特別支援教育支援員の配置が始まっている。支援員の数は前年度よりも増加し、今年度は幼稚園にも支援員が配置された。また、福岡市立の各学校の特別支援教育コーディネーターや各関係機関が集まり、学校間の情報交換を行う全市特別支援教育連携協議会が開かれ、特別支援教育の内容の充実を図っている。

(3) これまでの研究から

これまで巡回相談では、小・中学校における校内支援委員会のあり方について研究を進めてきた。支援を要する児童生徒の行動を分析的に(特に良さ、できることに着目して)考えることで、子どもの困難の背景や支援の方向性を導き出すことができるのではないかと考え、そのために必要なツール(アクションプランシート等)の開発を行ってきた。また、ケース会議等を通じて校内での共通理解を図る取組も推進してきた。その結果、気になる児童生徒についてその行動をどのように捉え、支援方法を校内支援委員会の中でどう検討していったらよいか、その方法が明らかになったと思われる。

しかし、訪問する中で現場の先生方から、「個への支援の必要性はわかるが、周りの子どもと一緒にどう支援したらよいかわからない」「一人だけ特別な支援はできない」という声が聞かれることも多い。また、支援を行うことで「今は落ち着いているが、来年が心配。学校内では共通理解できていても進学時の引継ぎをどうしたらよいか」といった声が聞かれる。

これまでの研究や巡回相談での取組の中でも、支援を要する子どもが落ち着いて過ごせる学級作りや適切な支援をつなぐための取組が課題としてあがってきている。

そこで、支援を要する幼児児童生徒の生活の質の向上を目指すためにさらに必要な条件として、「学級作り」「支援をつなぐため

の取組」の2点について、その手立てを明らかにしていくことが必要であると考え、本主題を設定した。

巡回相談の概要

平成 21 年度に行ってきた巡回相談の事業内容は以下のとおりである。

1 対象

(1) 幼稚園、小・中・高等学校の通常の学級に在籍する学習障がい(LD)、注意欠陥多動性障がい(ADHD)、高機能自閉症等の発達障がいのある幼児児童生徒(その疑いのある幼児児童生徒を含む)。

(2) 通級指導教室に通級している児童生徒は本事業の対象としていない。

2 巡回相談の構成員

巡回相談は、発達教育センター職員(主任指導主事等)と外部専門家で構成される。外部専門家は、学識経験者、臨床心理士、言語聴覚士等で構成され、専門的な立場から助言を行う。

3 学校支援の内容

対象の幼児児童生徒が在籍する学校に、学期に1～2回の頻度で年間複数回訪問し、授業参観、校内支援委員会との情報交換会等を通じて以下のような支援を行う。

- (1) 幼児児童生徒の理解、支援の方向性についての助言
- (2) ケース会議への参加
- (3) 次年度への引継ぎ情報のまとめ、
- (4) 個別の指導計画作成についての助言
- (5) 必要に応じて外部専門家の助言・相談

4 平成 21 年度の実績

平成 21 年度の巡回相談の学校訪問の実績は表1のとおりである。

表1 平成 21 年度巡回相談の訪問実績(12月現在)

校種	ケース数	校数	訪問回数
幼稚園	3	2	7
小学校	28	25	68
中学校	1	1	3
高等学校	0	0	0
計	32	28	78

Ⅱ 研究の目標

○支援を要する子どもの学校における生活の質の向上を図るために「学級作り」と「支援をつなぐための情報整理」のあり方について、学校が行うべき取組を整理し、そのために必要な手立てについて究明する。

- ・1 年次…「学級作り」「支援をつなぐための情報の整理」について必要な条件を整理し、そのために必要なツールを開発する。
- ・2 年次…作成したツールを利用して事例の検証を行う。

Ⅲ 研究の方法

1 研究の仮説

これまでの取組に加え、以下の2点に着目した取組を行えば、さらに支援を要する子どもの生活の質の向上を図ることができるであろう。

- (1)巡回相談において子どもにより変容が見られた事例の支援を分析し、「学級作り」に必要な条件を整理する。
- (2)今、行っている支援を分析的にまとめ、進学先へ必要な情報を資料化する。



図1 研究の構想

2 方法

(1) 子どもにより変容がみられた支援の分析を通して、支援に必要な条件を整理する

平成 20 年 1 月，中央審議会は特別支援教育の教育課程において「ICF（国際生活機能分類）の考え方を踏まえ，自立と社会参加を目指した指導の一層の充実を図る観点から，子どもの的確な実態把握，関係機関等との効果的な連携，環境への配慮などを盛り込む」と明記した。ICF の考え方では，障がいのある子どもの特性だけでなく，家庭や学校，学級といった「環境因子」の重要性が大きくクローズアップされている。（図 2）

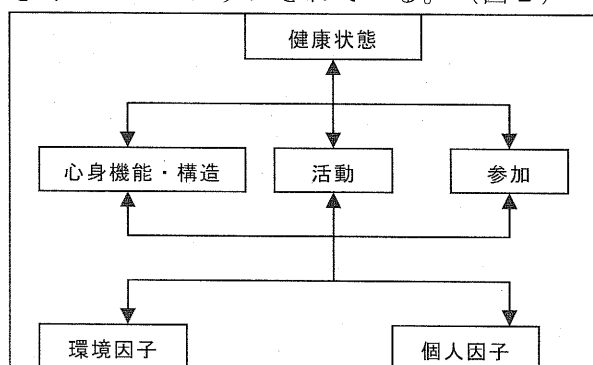


図2 ICFの相互作用モデル

支援を要する子どもの支援を行うにあたっては，属する集団（学級）の状態により，その子の困難さが大きく変化すると思われる。特別支援教育を推進する上で学級作りは大切なポイントとなると考えられる。

高山(2009)は，支援を行うにあたって「個別指導とクラス作りは車の両輪で，どちらが欠けても車は脱輪する」と述べている。篠田(2009)は，特別支援教育を行う上での基本は「すべての子どもを大切にしたい学級経営である」と述べている。

そこで，本研究では「学級作り」に焦点をあて，「特別支援教育を進めるための学級作りに必要な条件」について整理する。研究の方法として，今年度，巡回相談を行う中で子どもにより変容が見られた事例について，何がよかったのか，教師の支援内容の分析を行う。児童生徒の行動についての分析はこれま

で行ってきたが，その中でも「直前の状況」について着目し，特に「教師がどんな支援をしたか，何がよかったのか」の視点で担任と一緒に整理を行う。（図3参照）



図3 研究の方法

支援のポイントを整理し，それを可視化して共通理解するためのツールとして，アクションプランシート2（分析シート）を利用した。（図4参照）

★アクションプランシート2（分析シート）★		
作成日時	小学校（ ）	
参加者		
話 題（近況等）		
事例の整理（なぜ、こう変化したのか？）		
何がよかったか	できること	行動の結果得られる事 子どもは 先生は
うまくいった事例に対して、どのような変化が見られたかを整理し、何がよかったのか（きっかけになったこと）について先生に考えてもらいます		
直前のきっかけ・状況	課題となる行動	行動の結果得られる事
どんな支援がよかったのでは？（先生のGoodな支援）		
参観させていただいた学級の様子、授業から考えられることを先生と協議しながらその子にとって有効な支援をまとめていきます。		

図4 アクションプランシート2（分析シート）

(2) 進学先へ支援をつなぐための情報の整理

支援を継続させるためには、今行っている内容を整理し、的確に伝えることが大切である。学年が上がり担任が変わる際には、これまで校内支援委員会の中で作成してきたケース会議シートやアクションプランシートを利用して校内で支援方法の共通理解を図ることができるが、幼稚園から小学校、小学校から中学校、中学校から高等学校へと進学する際にはそれらをまとめた情報を伝える必要があると思われる。

今年度、新たに巡回相談の対象となった市立の幼稚園、高等学校に対しては各学校に訪問して、それぞれの持つ実態やニーズの聞き取り調査を行った。その中で、引継ぎに関する実態についても調査を行った。

幼稚園では、保幼小連絡会などで引継ぎを行うが、新担任が決まる前の連絡会で係の先生に情報を口頭で伝えるシステムが殆どである。小学校への送付書類は指導要録のみという園が殆どである。幼稚園の先生方からは「実態がうまく伝わるか心配」という声が上がっていた。

高等学校においては、入学してくる生徒の実態について、中学校からの情報が得にくく、気になる生徒に関しては入学後に担任等が直接、中学校に電話して実態や手立ての聞き取りを行っているとのことであった。支援を要する生徒について中学校からの文書での引継ぎ資料の必要性を感じている学校も複数あった。

以上のことから、幼稚園から中学校まで各学校においては、引継ぎに必要な情報を整理し、可視化させて進学先に渡すことが大切なことであると考えます。

巡回相談では進学先への引継ぎに必要な情報として次の3点を提案する。(図5参照)

巡回相談が考える進学先への引継ぎに必要な情報

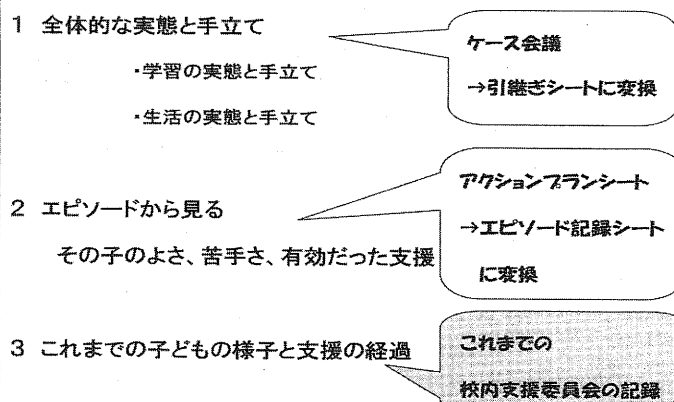


図5 進学先への引継ぎに必要な情報

引継ぎの書類作成にあたっては以下の点に留意して作成することが必要であると考えます。

引継ぎの書類作成の留意点

○受ける側（進学先）にとって

- ・見やすい、わかりやすい
- ・具体的手立てがわかる

○作成する側は…

- ・書類作成の負担軽減
- ・担任だけでなく校内支援委員会で作成
- ・伝えるポイントの明確化

進学時に必要な情報を整理し可視化させて、次の学校に渡すためのツールとして巡回相談では、これまでに校内で行ったケース会議、協議の内容を応用して作成する「引継ぎシート」「記録シート」の2点を提案した。これまである資料を効率的に活用することで書類作成の負担が軽減され、ケース会議等で複数の職員で共通理解した内容を伝えることができる、具体的な対応方法についても伝えることができるといったメリットがあると考えます。

① 全体的な実態や支援の手立てを伝えるためのツール「引継ぎシート」

引継ぎ資料を作成するにも、どのようなものを残すといいのか、その様式さえも決まったものはない。そこで、エクセルファイルを利用し

て、すでに学校が持っているケース会議シートを引継ぎシートに変換できるツール（小・中学校用 図6、幼稚園用 次項図7）を作成した。

② エピソードから特性をまとめる

「エピソード記録シート」

継続した支援を行うにあたっては、トラブルに対応していくよりも、予防策を前もってとるという視点が重要と考える。ある学校の先生は、「具体的なエピソードを話してもらえると、一番その子のことがわかる」と話していた。学校生活の具体的な場面で「こういう時にはこうなることが予測される」「どのように支援すればトラブルを起こさなくてもいいのか」

を把握しておくことは大切である。そのためには現担任が、具体的なエピソードを整理し、特に「うまくいった支援」を次の学校に伝えることが重要な作業になってくる。

これまで様々な学校で子どもの記録をつけている先生方に出会ってきたが、情報の整理ができていないために引継ぎの資料としては殆ど活用されていない。日々のエピソードを分析的に記録することで、児童生徒の特性や対応方法を分かりやすく伝える引継ぎ資料になるのではないかと考え、エピソード記録シート（次項図8）を作成した。

校内支援委員会・ケース会議資料()学校							
開催日		出席者					
支援目標							
主な教科	学習活動	長さ	気になるところ	予想される原因	今までやってみた 手立て	困難の背景にあるもの （共通課題）	支援・配慮事項 （共通課題）
主に国語 （社会・英語）	聞く						
	話す						
	読む						
	書く						
主に算数・数学 （理科）	計算する						
	推論する						
国工・美術	絵を描く						
音楽	楽器を演奏する						
体育	運動する						
生活面・行動面							

引継ぎのための資料()学校					
対象児()					
特性	長さ		気になるところ		特性
	長さ	気になるところ	長さ	気になるところ	
学習活動	聞く			推論	
	話す			美術 国工	
	読む			音楽	
	書く			運動	
	計算			生活	
生活面・行動面	配慮事項				
	聞く			推論	
	話す			運動	
	読む			音楽	
	書く			美術 国工	
	計算			生活	
特記事項					

ケース会議で作成した
資料をエクセルデータ
で変換

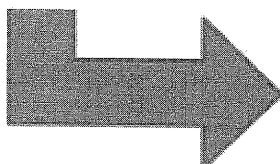


図6 引継ぎシート（小・中学校版）

校内支援委員会・ケース会議資料()幼稚園 番 性別 氏名				
会議日		出席者		
支援目標				
主な項目	活動内容	良さ	気になるところ	予想される課題
学習面	聞く			
	話す			
	見る			
	運動する (遊ぶ、散歩)			
	数や文字への興味			
	物を置く、工作など			
遊び	興味・関心			
	社会性 コミュニケーション			
	行動 (集中時間、こだわり や優越性の有無など)			
生活面 (食事、排泄、 着脱、睡眠時間)				

ケース会議の内容を個別の
指導計画に変換

平成()引き継ぎシート ()幼稚園 対象児()					
特性					
	よさ	気になるところ	よさ	気になるところ	
実 態	聞く		図工		
	話す		興味・関心		
	見る		社会性・コミュニケーション		
	運動		行動		
	数や文字への興味		生活		
	配慮事項				
つ づ く	聞く		図工		
	話す		興味・関心		
	見る		社会性・コミュニケーション		
	運動		行動		
	数や文字への興味		生活		
	留意事項				

図7 引継ぎシート（幼稚園版）

エピソード記録シート(行動の記録)

エピソードを整理してみよう

どんな時 (きっかけ、こんな対応をした)	こんな様子が見られた(行動) 望ましい行動○課題となる行動△	その後、どうなった (結果)

エピソードから特性を考えてみよう

よさは	苦手なところは	こんな支援は有効
-----	---------	----------

図8 エピソード記録シート

IV 今年度の研究の計画

月	主な研究事項
4月	◆研究テーマの検討・決定 ◆研究計画の立案
5月～12月	◆事例校を訪問し、調査研究 ◆研究報告書の内容検討・作成
1月～2月	◆事例校を訪問し、調査研究 ◆今年度の研究のまとめ
3月	◆研究内容及び資料等の整理と管理

V 研究の実際

ここでは、学級作りと移行支援について一つずつ事例を挙げる。事例は、対象児童生徒のプライバシーに配慮し、内容を若干変更し、概要のみを記述する。

1 支援を分析することで学級作りのあり方を考えていった事例(事例A)

(1) ケースの概要

①巡回相談申込時の対象児の状況

- ・集団行動ができない
- ・授業中に離席して友だちの邪魔をする
- ・集中時間が短い

②巡回相談が行ったこと

- ・児童の行動を分析的に捉え、有効な支援方法について校内支援委員会で検討する

③12月現在の対象児の様子

- ・学習に参加する時間が伸びた
- ・友達とのトラブルがほとんどなくなった
- ・学習時、人の邪魔をすることがなくなった

(2) 事例の分析

子どもの変化について、どんな支援が有効だったのかについて担任に分析してもらった。さらに、参観させていただいた授業の様子については一緒に分析を行い、協議していった。(図9参照)

協議の中で、授業の参加度をあげるために有効だった支援として、集中時間が短いA君に対して、1時間の授業の中で何をするのかについて板書して見通しを持たせたこと、活動を細かく区切り、テンポよく次々に展開させていったこと、作業時にも待ち時間を作らず終わった人から次の活動に取り組めるよ

うな工夫がされていること、模型等の具体物を使うことで興味を持続させ、注意を引き付けることができたことなどがあげられた。

また、担任は、学級全体がAさんの特性を理解し、優しく接してくれるようになったことで本児にとってクラスが居心地のいい場所となり、落ち着いて学級で過ごせるようになっていったのではないかと話していた。

この事例では校内支援体制の構築と共に本児が活動しやすい環境や授業内容を工夫し、その中で褒められ認められる状況を作ったことがAさんのよい変容につながったのではないと思われる。

活動しやすい環境や授業内容はAさんだけに有効な支援ではなく、他の児童にとってもわかりやすい支援であり、学級全体が落ち着いて学習に取り組むことでAさんも穏やかに過ごせるようになったと思われる。

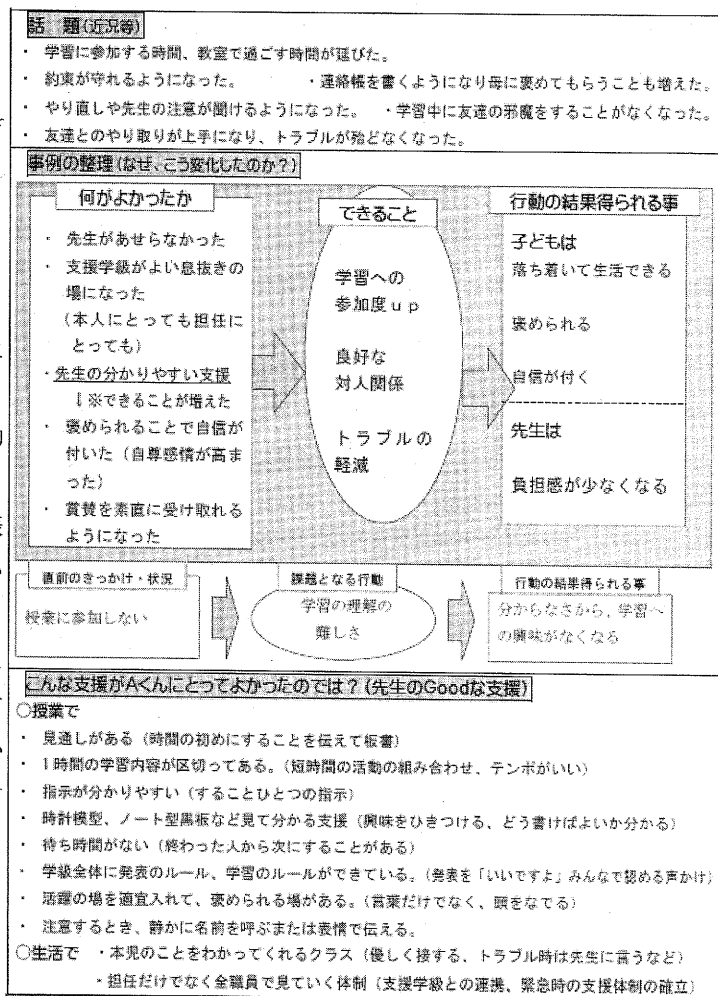


図9 教師の支援の分析(事例A)

表2 学級作りのためのチェックリスト

学級作りのためのチェックリスト(試案)

(3) 考察

巡回相談で関わった複数の事例について上記のようにアクションプランシート2を用いて、教師の支援の整理を行っていった。協議の中で有効だった支援として出てきた内容は、学習の参加度を上げるためのわかりやすい授業作りの工夫やその子が安心して過ごせる集団作りの工夫などであった。

それらをまとめると、学校での生活の質を高めるためには、支援を要する子どもも含め学級の子ども全員にとって「安心できる居心地のよい学級」であることが大切であり、「どの子にもわかりやすい授業作り（授業のユニバーサルデザイン化）」を行うことが必要であると考えられる。「安心できる居心地のよい学級」「わかりやすい授業作り」の条件について、巡回相談では「特別支援教育を進めるために必要な条件」として（図10）のようにまとめた。また、必要と思われる支援項目をまとめて「学級作りのためのチェックリスト」（表2）を作成した。

安心できる居心地よい学級	落ち着ける環境	・教室前面は必要なものだけ、掲示してある ・不要な物を置かないなど教室内の整理整頓ができている ・時間割、当番表など見てわかりやすい掲示がされている ・支援の必要に応じて座席の配置が工夫されている
	わかりやすい規律やルール	・学級の目標が分かりやすく掲示してある ・ルールを目に見える形で示し、説明している ・ルールが守れている児童を多様な方法で取り上げ賞賛している ・丁寧な言葉使い、場に応じた話し方、肯定的な話し方を指導している ・話し手を見て最後まで話を聞くよう指導している ・子どもの個性や長所を生かした学級全体で取り組む活動を設定している ・個に応じた支援について、学級のメンバーが納得している
	違いを認め合い、助け合う雰囲気	・担任と子ども達の間に信頼関係がある ・頑張っている子どもの行動を積極的に取り上げ、進んで賞賛や拍手を送る雰囲気を作っている ・結果より努力したことを具体的に取り上げ、評価している ・頑張っている友だちを言葉や態度で応援する雰囲気がある
授業のユニバーサルデザイン	見通しを持たせる支援	・1時間の学習の流れとねらいをわかるように伝えている ・学習の流れをパターン化している ・作業など行う時に何をいつまでにすればよいか、見てわかるように伝えている（タイマーなど利用しながら） ・板書やプリントの中を見ると学習の流れがわかるような工夫をしている
	わかりやすく伝える支援	・ゆっくり、短い言葉で、具体的に話をしている ・学習のルールを見える形で伝えている（声の大きさ、挙手の仕方、発表の仕方など） ・大事な言葉がわかりやすいような視覚的な工夫がなされている（板書の工夫、色、マグネットなどの活用） ・子どもの注目を集める声かけや視覚的な工夫をしている ・一つの指示で一つの活動ができるようにしている ・子どもの集中時間に応じて、授業を複数の活動に分けて進めている
	意欲を持たせる支援	・子どもの力に応じて個に応じた教材を使用させている。（複数の課題や量の調整、支援教材の準備など） ・子どもの頑張りを認め、褒める支援に心がけている ・間違っても、気持ちや態度を受け止め、プラスの声かけをしている ・援助の求め方を教え、使うことができるように指導している

特別支援教育を進めるための学級作りに必要な条件とは

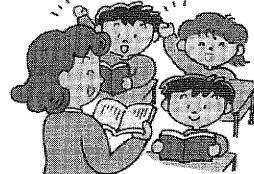
特別支援教育を進めるための学級作り



安心できる居心地よい学級



授業のユニバーサルデザイン



落ち着ける環境

わかりやすい規律やルール

違いを認め合い、助け合う雰囲気

見通しを持たせる支援

（学習の流れを明確にする、何をいつまでにどうすればよいかを伝える など）

わかりやすく伝える支援

（伝わりやすい指示の出し方、話だけでなく見てわかる支援、教材の工夫など）

意欲を持たせる支援

（ほめる、認める、活躍の場を作る、実態に合わせた活動の工夫 など）

※ ユニバーサルデザイン…障がいの有無などにかかわらず、できるだけ多くの人にとって有効であるように作っていくこと

図10 学級作りに必要な条件

2 小学校から中学校への進学時に必要な情報を整理し、資料化を行った事例（事例B）

今年度、巡回相談の32ケースのうち4ケースの児童生徒が進学を迎える。その4ケースについては、巡回相談では「学校が進学先への引継ぎを意識して、自分たちの支援を整理すること」を目的に支援を行ってきた。

(1) 情報の整理

①「アクションプランシート」

→「エピソード記録シート」

昨年度に作成したアクションプランシートは、担任が対象児童生徒の「よさ・できること」に着目し、その「よさ・できること」から支援

を導き出すものになっている。今年度も巡回に行くたびに担任からの具体的なエピソードを聞き取り、アクションプランシートを作成することによって、担任の気づきを整理していった。

「なぜ、この時には学習に参加できるのか？」の「なぜ？」を担任に問いかけていくと、殆どの担任は、すでに答えを持っていることが多い。担任が自ら気づき、言語化したことは、第三者からの助言という形をとるよりも、日々の実践につながるものになりやすいと思われる。巡回相談で作成したアクションプランシートをエピソード分析シートに転記し、引継ぎ資料としてまとめていった。（図11参照）

★アクションプランシート（記録用）★

作成日時 2009/10 日小学校（ ）

課題の整理（なぜ、こんな行動・言動をするのか？）

直前のきっかけ・状況

修学旅行グループ行動（興味の持てる活動）宿題（パターン化）

いろいろな先生にはめてもらう

直前のきっかけ・状況

友だちにもよっかいをかけられる（友だちはふざけているが本人には伝わらない）注意されるのがイヤ自分より弱い友だちにもよっかいをかける

直前のきっかけ・状況

満腹がうまく出ないどう言うところかわからない通りがかりに人が集まる

できること

みんなと協力してやろう

行動の結果得られる事

楽しく過ごせた

エピソード記録シート（学習時の記録）

エピソードを整理してみよう

どんな時 (きっかけ、こんな対応をしたら)	こんな様子が見られた(行動) 望ましい行動○課題となる行動△	その後、どうなった (結果)
プリント学習	○ 学習にとり組むことができる	達成感を持つ事ができる
多くの先生に誉められた	○ 意欲を持って学習に参加する	誉められて嬉しい
教材に魅力がある	○ 学習にとり組むことができる	達成感を持つ事ができる
見通しが持てる宿題	○ 学習にとり組むことができる	家庭でも認めてもらえる
どんどん発表させる	○ 意欲を持って学習に参加する	達成感を持つ事ができる
書くことに自信がない	△ 書きたがらない	授業中、別の事を始める
学習のパターンが変わった	△ 間違いが増える	自信が持てない

エピソードから特性を考えてみよう

よさは	苦手なところは
・プリント学習には取り組む	・書くことが苦手
・視覚的なものがあるとわかりやすい	・興味の先行
・認められると嬉しい	・集中することが苦手
・注目されると嬉しい	・新しいことに見通しを持ちにくい
	・注意を向けるべきところがわからない
	・長い話を聞き取れない

こんな支援は有効

- 書く量の負担の軽減
- ワークシートを取り入れる
- 興味の持てる内容（日常、経験できること）
- 目で見てわかる支援（視覚的な支援）
- 活躍の場をつくる（自尊感情を上げる）
- 授業の活動の展開の工夫
- 個別の指示
- 座席の位置（周りに落ち着いた友）
- 指示は短く

図11 アクションプランシート→エピソード分析シート（事例B）

② ケース会議シート→「引継ぎシート」

本児童においては、前年度のケース会議シートが残っており、そのシートをもとに加筆修正するなど、学校が積極的に資料の活用を行な

っていた。加筆修正は、対象児童生徒の変容もみることができ、なぜ改善されたのかを分析することにもつながった。それを引継ぎシートに変換した。（図12参照）

校内支援委員会・ケース会議資料 B 小学校				6年	氏名
会議日		出席者			
支援目標					
主な教科	学習活動	良さ	気になるところ	予想される原因	今までやってみた手立て
主に国語 (社会・英語)	聞く	・興味の有ることは聞ける ・個別の指導	・一言指示は苦手	平成(21)年度 引き継ぎ資料 B小学校 () 記入者	・聴覚 < 視覚優位 ・興味の先行 ・自分の気持ちを言葉で伝えることが苦手 ・思ったことをすぐに言う ・人の気持ちを読むことが苦手 ・読み取りが苦手 ・見通しが持たない ・自分の思いが先行する ・自信のなさ ・負ける のがイヤ ・注目を浴びたい ・集中できる時間が短い ・抽象的なことがわかりにくい
	話す	・みんなの前で話すことが好き ・得意分野で発表したが	・思ったことをすぐに口に出す ・気持ちに合った言葉がうまく出ない ・表現することが苦手		
	読む	・絵本が好き ・絵があれば内容理解がしやすい ・ゆっくり自分のペースで読むことができる	・読み取りが苦手 ・読むスピードが遅い ・読書は始どしない		
	書く	・宿題は丁寧に ・ワークシートは得意	・書きたいことを思いつかない ・漢字を使いたがらない		
主に算数・数学 (理科)	計算する	・得意	・文章問題は苦手 ・反復練習は嫌がる	特性	よさ 気になるところ ・興味の有ることは聞ける ・個別の指導
	推論する	・自分なりに解き方を考え、発表することができる			
図工・美術	絵を描く	・大好き	・途中でアドバイスされると嫌がる	聞く	・自分なりに解き方を考え、発表することができる
音楽	楽器を演奏する	・打楽器はできる	・リコーダーが苦手	話す	・みんなの前で話すことが好き ・得意分野で発表したが
体育	運動する	・意欲がある	・自分の思い通りにならないと途中から抜ける ・わざと	読む	・絵本が好き ・絵があれば内容理解がしやすい ・自分のペースで読むことができる
生活面・行動面	・友だちが好き		・相手の気持ちを考えた発言ができない ・特定の友だちと言い合いになる	書く	・宿題は丁寧に ・ワークシートは得意
				計算	・得意
				配慮事項	・視覚支援(スケジュール表、手順表の提示) ・見通しを持たせる ・「言っている言葉と書いてある言葉が違う」ということを意識させる ・本人の経験や興味あることを取り入れる ・自信の持てる活動の中で活躍の場をつくり、いい注目を浴びられるようにする ・誉める ・個別の声かけ ・ワークシートの活用 ・授業を短いスパンで展開する ・理解が進むようにかみ砕いて話す
				聞く	・手帳表など視覚的なものには注意が向く(指示の工夫)
				話す	・発表の機会を増やす ・振り向きを一つ一つにする
				読む	・一緒に問題文を読んでわかるように言い換えてあげる
				書く	・個別指導の中で書かせる ・自分が体験した具体的な出来事を書く ・取りながら、文をつなげる
				計算	・少し遅れてみる ・「言っている言葉と書いてある言葉が違う」ということを意識させる
				配慮事項	・手帳を通して一緒に練習する ・得意なところで参加(活躍の場)
				聞く	・手帳を通して一緒に練習する ・得意なところで参加(活躍の場)
				話す	・手帳を通して一緒に練習する ・得意なところで参加(活躍の場)
				読む	・手帳を通して一緒に練習する ・得意なところで参加(活躍の場)
				書く	・手帳を通して一緒に練習する ・得意なところで参加(活躍の場)
				計算	・手帳を通して一緒に練習する ・得意なところで参加(活躍の場)

図12 ケース会議シート→引継ぎシート(事例)

(2) 巡回相談の関わりと学校の変容

① ケース会議を進める力

学校が気になる児童生徒に対して、どのように支援していくといいのかを、担任任せにせず、校内支援委員会の中で話し合いを進め、検討していこうという体制がかなり整備されてきた。

また、校内研修会の中でもケース会議の進め方について職員全員で研修も実施している。

② 引継ぎへの意識

現担任が、対象児童の将来を見据えて、進学先につなぐ役割を年度当初から意識して支援にあたることができた。

VI 成果と課題

1 成果

(1) 学級作り

○教師の意識の変化と負担感の軽減

子どもによい変容が見られた事例の分析を行う中で、日頃先生方が意識せずに行っている授業作りや学級経営が支援を要する子どもにとって大変有効な支援であることがわかっていった。ある先生は「自分は特別の事をしているわけでない、クラス全員にしていた配慮や授業作りがこんなに有効だとは思わなかった」と話していた。また、ある事例では気になる子どもの授業参加を促すために取った手立てが他の子どもの授業への参加度や集中度を上げることに役立ったと話していた。これらのことから、まずは特別な取組や支援でなく、日常の学級経営や授業作りを配慮していくことが特別支援教育を進める上での第一歩になると考える。日常の取組を整理し、その有効性を評価していくことは、教師の自信につながり、「特別な支援をしなければならない」という負担感を軽減することにつながっていったのではないかと考える。

○よかった支援、学級作りに関する情報の共有

「どんな支援がよかったか、どのような学級作りが有効だったか」についてアクションプランシート2を使って可視化し、校内支援委員会等で共通理解することで、校内でもうまくいった支援や学級作りに関するノウハウを共有することができた。これは次年度への支援にもつながると考える。

(2) 支援をつなぐための情報整理

今回、2種類のシートを作成したが、シートを作っていくことで、次の学校にどんな情報を伝えればよいかを整理することができた。これまでのケース会議や記録を整理する

だけで、時間をかけずに資料作りが行えたことで、先生方の負担感を軽減することができたのではないかとと思われる。

2 課題

(1) 学級作りと幼児児童生徒の変化との関連に関する客観的な検証の必要性

今年度は、事例から「特別支援教育を進めるために必要な学級作り」についてまとめ、チェックリストを作成した。それらがすべての事例において有効なものであるかどうか、客観的な検証はまだなされていない。今後、チェックリストの数値化等を含め客観的な検証方法について検討し、次年度は巡回相談で関わる事例を検証することで客観性を見ていきたいと思っている。さらに、最終的には学校が学級作りについて自分達でチェックし、取り組めるようなツールに発展させていきたいと考える。

(2) 受ける側のニーズに応じた引継ぎ資料

今回、対象児の「全体的な実態と手立て」「エピソードからみるよさ、苦手さ、有効だった支援」の2点については見やすくわかりやすいツールを作成することができたが、もう一つの大切な情報である「これまでの子どもの様子と支援の経過」についてはまだ作成できていない。今後、情報をわかりやすく整理するツールの開発を行っていきたい。

また、本研究では、巡回に関わった6年生の事例を通して資料作りを行ってきたが、実際にそれが役立つ資料となりうるかは、入学する中学校での検証が必要になる。次年度は、入学する学校とも連携を図り、作成した情報の有効性について検証していきたい。

さらに、今後、入学を受ける際に小・中・高等学校が必要と考える情報を調査し、さらに各学校のニーズに応じたよりよいツールを作っていきたいと考える。

参考文献

- 湯浅恭正（2009）特別支援教育を変える
芽生えを育む授業作り・学級作り
子どもの集団の変化と授業作り・学級作り
自立への挑戦と授業作り・学級作り
- 高山恵子（2009）発達障害の子どもとあったかクラス作りー通常の学級で無理なくできるユニバーサルデザインー
- T O S S 学校づくり研究会著 特別支援教育で学校を変える
- 岡山県総合教育センター（2009）通常の学級における特別支援教育の観点からみた学級経営・授業づくり
- 長澤正樹（2009）ユニバーサルデザインで授業を試みませんか
- 文部科学省（平成 20 年度）平成 20 年度特別支援教育体制整備状況調査
- 文部科学省（平成 20 年）幼稚園教育要領，小学校，中学校学習指導要領
- 文部科学省（平成 21 年）高等学校学習指導要領
- 福岡市発達教育センター（平成 17～20 年度）非常勤研修員及び長期研修員研究報告書
- 厚生労働省（平成 14 年）「国際生活機能分類 - 国際障害分類改訂版 - 」
- 三重県（2009）ユニバーサルデザインの町づくり

研究指導者

西南学院大学	教 授	野口 幸弘
発達教育センター	研修係長	向江 勇二
	主任指導主事	小崎 俊司